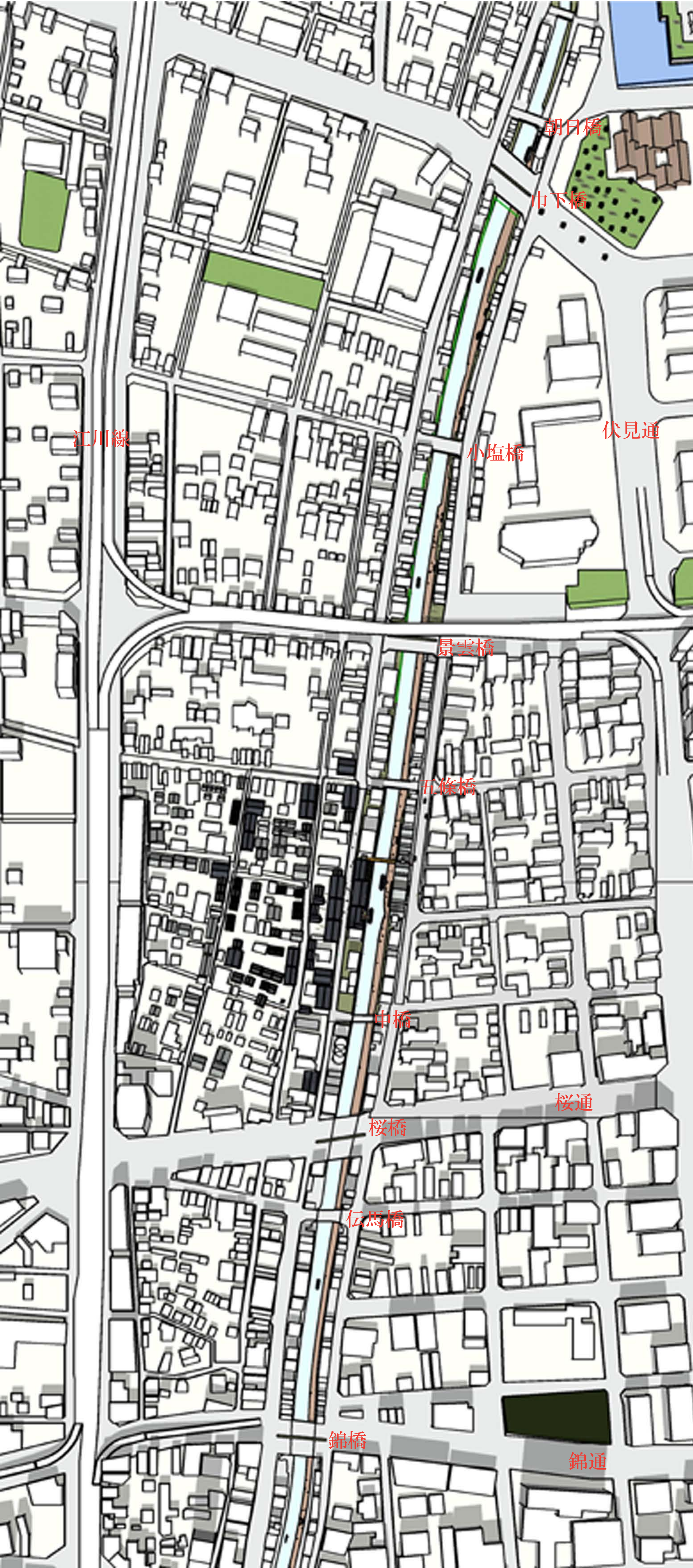




堀川の再生

かつて生活・文化の中心であった堀川を、
“**歩きたくなる堀川**”へと再生する。

世界の主要都市には必ず魅力的な水辺空間があり、多くの人々で賑わっているが、魅力度が低いと言われている名古屋のイメージを高める為にも、貴重な水辺空間「堀川」を魅力ある親水空間として再生することは、喫緊の課題である。

■水辺にウッドデッキを新設する。

堀川沿いに今も残る貴重な歴史遺産を眺めながら、より親水性を高める為に水辺に近い位置に干満の差に対応できる浮動式式ウッドデッキを新設する。このウッドデッキは朝日橋から納屋橋までの約1.8kmの距離を連続して歩ける幅7mの規模とする。

■堀川の浄化を自然の力で考える。

堀川の浄化の為、名城公園に干満の差を利用して約5haの心肺機能としての「人工干潟」を提案する。

人工干潟の詳細は「御深井御庭の復元」参照

■中川運河との接続を考える。

かつて堀川と中川運河を結び名古屋の産業発展を支えていた松重閘門の機能を復元し、中川運河との水上交通のリンクすることで新たな水上交通インフラを実現する。

H27年度水質調査結果

	溶存酸素(DO)	生物化学的酸素要求量(BOD)
堀川(納屋橋) 年平均値	3.3mg/L	2.6mg/L
道頓堀川(道頓堀橋)6月6日	2.81mg/L	1.1mg/L
隅田川(尾竹橋)3月2日	7.18mg/L	1.28mg/L

・道頓堀川：溶存酸素（DO）5mg/L以上 生物化学的酸素要求量（BOD）3mg/L以下

・隅田川：溶存酸素（DO）5mg/L以上 生物化学的酸素要求量（BOD）5mg/L以下

溶存酸素（DO）

水中に溶けている酸素の量。有機物で汚濁した水中では、生物化学的酸化により酸素が消費されて溶存酸素が減少する為、水質汚濁の指標の一つとなる。魚などの生息には酸素が必要な為、この量が多いほど水質は良い。一般に魚は2mg/L以下は生息出来ない。生物化学的酸素要求量（BOD）

水中の好気性微生物が有機物を分解するときに消費する酸素の量。河川の水質汚濁の代表的な指標として使われ、魚介類の生息にとって5mg/Lを超えることは好ましくない。



景雲橋上空より堀川（北方向）を望む



桜橋上空より堀川（四間道界隈）を望む